

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

魔導師ランク

触手SSS



時間軸犯罪

最近になってある術式の研究者が開発した『時間軸転送』即ちタイムスリップを行い、過去に遡る事で現在あるべき姿を捻じ曲げてしまう犯罪である

中でも悪質なものは特定の人物を過去の時間軸において、何らかの方法で消してしまい、自らの時間軸においてもいないものと変えてしまうもの

この方法は未来において強い力を持つ要人に対して、成長期前を狙うことができ特に有効であり、更に時間軸を操る事で探知の難しい空間へと連れ込まれてしまうため、予防は勿論、その後の隠蔽も非常に容易く、凄まじい勢いで被害が拡大していた…



パキ…

フフ…目覚めたかしら、
フェイトちゃん？
早速だけどあなたを樂園にご招待するわ フフフフ…



魔導師ランク

触手

SSSS

フフ：改めまして『こちらでは』
はじめましてフェイトちゃん：
お姉さんはね、十年程先の未来で
貴女に逮捕されてしまった悪い悪い
科学者なの：それでね、悪い悪い
お姉さんは復讐を企てたの

でも十年後の貴女はすごく強くて
隙がない：そこで私は何も知らない
過去の貴女で復讐を果たす事にした
の、過去の貴女をどうにかしてしま
えば十年後の貴女にも影響がある
でしょうからね

フフ…大丈夫、痛い事はしないわ？これはね、女の子に優しくお仕置きする為のお薬なの

ぞくぞく

ツ…?!

トロ

貴女の身体のありとあらゆる場所に塗り込んであげるわ、このグロい生物を使つてね？

や?!

グチュ

ヌル

ヌル

やあ!!

あーらあ？そのバリア：…なんだっけ？
まるでこうしていじめられる為の格好
じゃない♪ヌルヌルテカテカに光って
ものすごくエッチ：お姉さんも高まつ
てきちやっただわあ…

なあに〜？お豆さんをコリコリ
されるのがそんなのいいの？
いいわよお徹底的に弄ったげる♪

いや…
やっ！！

ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ

ツッ...ッ

ツッ...ッ!!

すっかり馴染んじやった
みたいね、こうして処女
マ●コやお尻にねじ込ま
れたのに一突きする度に
イッてるんですもの♪

グワッ

ガク
ガク

ポプ

ポプ

ウフ：フェイト：トロットロに
蕩けた貴女の顔：ホントかわいいわ
面白いから暫くお茶でもして堪能さ
せてもらおうわ

せいぜい悶え苦しんで頂戴♪

あ……

うあ……

この空間、無能な管理局の連中でも三日くらいかければ探知できると思うからそれまで頑張りなさいね？

な……

の……

さあて、たつぷり楽しんだし私はもう帰るわ？憎き執務官に引導も渡せたし貴女にはもう用も無いもの

戻った先の時間軸で貴女がどう変わり果ててるか楽しみだわ、お墓の中じゃないといいけれど……じゃあね♪

THE END

Guest
INふえるの



「ん、あ……やあああああああっ！」

暗闇の中に、アリシアの絶頂の叫びが響きわたる。

びくん、びくん、とその小柄で、しなやかな身体が痙攣を起こしてわずかに跳ねた。

「ふ、は、あ……ああ」

もう何度、こうして声をあげたことだろう。

涙でにじむ視界の端々で、プレイブシミュレーターの稼働ランフがゆっくりと明滅している。

両手、両脚を固定されほとんど身動きが取れない状態で、アリシアは下腹部に痺れるような感覚をおぼえて、太股をこすりあわせるようにしてわずかに身をよじった。

と、くちゅ、という甘い音がして、アリシアの頬が羞恥に染まる。

「も……ゆるし……て」

喉の奥から絞り出すような声で懇願するアリシアだったが、それが聞き届けられることはなく。

「あ、や、も、あああっ……！」

何本もの赤い、まるでなにかおぞましい生き物を思わせるような管が、這い回るようにしてアリシアの糸まとわぬ肌からみついでいく。

「だめ、おねが……も、あ、ああ……！」

顔、首筋、鎖骨、胸、腕、手、腹、太股、足と、全身をゆっくりと撻るよう刺激され、しかし逃げるどころか身動きすら取ることができず、アリシアはその身体を蹂躪されていく。

なぜ、こんなことになってしまったんだろう。

こんなはずじゃなかった。

これは、単なるプレイデュエルのテストプレイだったはずだ。

そう、新型のプレイデュエルの開発、そのテストプレイヤーとして、アリシアは招待されただけだった。

「や、もう、そこ、だめ……あ」

管の先端に取り付けられた柔らかなヒダのようなものが、アリシアの胸の先端、桜色の突起にからみつく。

「だ、だめ、や、おっぱい、あ、んんん……っ」

幾重にも重なったヒダの一つ一つが、代わる代わるアリシアの隆起した乳首に淫らな刺激を与えていく。

「は、あ、や、ん、あ、ああ……！」

ときには柔らかく包むように、ときにはピストンのような動きで擦りあげるように。

「や、ふ、あああああああっ！」

そして不意に強く摘まれると、アリシアの全身に痛みを越えた快感が走った。

「だ、だめ、やだ、おっぱい、とれちゃ、あ、ひ、んああ……」

そしてまた柔らかな刺激。と同時に、別の管がアリシアの自らですら触ってもいないであろう乳房を、こねあげるようにして揉みしだく。

「あ、ひ、は、あああ、ん……ああ」

最初は痛いだけだと思っていた胸への刺激が、いつの間にか快感に変わっていることをアリシアは自覚し始めていた。

最初は、そう最初は、自分の身になにが起こっているのかわからなかった。

協力を頼んできたのはプレイデュエルの開発者であるグランツ博士の弟子を名乗る青年で、師である博士から優秀なプレイヤーがいると聞き、ぜひ新型のシミュレーターをテストして欲しい、とショップT&Hにやってきたのだった。

柔らかな物腰、年下であるアリシアに対しても丁寧な言葉使い、そしてなにより「最新のプレイデュエルをいち早く体験」という落とし文句に釣られ、意気揚々と青年の研究所を訪れたアリシアだったが。

リリースアップするまでは、たしかに通常と同じプレイデュエルのシミ

ミ

ユレーターだった。

だが、仮想空間内のアバターに視点・感覚が転送されると、そこは完全な間の中だった。

意識はたしかに転移しているのだが、なぜか身体を動かすこともできない。故障か、と一度ログアウトを試そうとした、そのときだった。

「きゃっ……っ！」

突然、首筋のあたりになにかが触れた気がして、アリシアは小さく悲鳴をあげた。

確認しようにも、身体は動かず視界も間のみまだ。

「やだ、な、なに……？」

と、今度は腕や脚、それに胸や腰に、なにかが絡みつくようにしてアリシアの身体をまさぐり始めた。

「ちよっと、なに、これ、やだあ……っ！」

最初は、ミミズの化け物かと思った。

だが、たしかに形状はそれに近いが、その表面にはねばつく液体が染み出し、まるで生き物の舌に全身を舐められるような気持ち悪さを覚えて、しかし抵抗することもできずにアリシアは嗚咽をこぼす。

「ひ、ひゃ、ああ、やめ、やっ……！」

やがてそのうちの一本が、アリシアの腋の下、バリアジャケットの隙間からアリシアの肌を直接蹂躪し始めた。

「やああっ！ だめ、やだ、なに、あ、や、んんん……っ！」

生身と同じ感覚をアバターでも感じる事ができるのがプレイデュエルだが、そうは言っても娯楽であるため、疲労感などはそのままだが痛覚などはセーブされている。

しかし、いまアリシアが感じているそれは、これまでのプレイにおいて一度も味わったことのない、そう、言わば「快感」だった。

と言っても、デュエルに勝利したときに得られるような精神的なものではない。もっと直接身体に訴えかけてくる、「肉体的な」快感。

「ひゃ、あ、だめ、そんな、やだ、あ、あああ……っ！」

その未知の感覚に、アリシアのその実年齢よりも発達遅れた身体が耐えられるはずがなかった。

バリアジャケットの隙間から奥へと侵入した管の先端のヒダが、アリシアの胸の先に触れる。

「ひい……っ！」

ヒダが、アリシアの乳首を根元からこすりあげる。

「や、ひ、あ、あああああああ……っ！」

びくん、とそれまで身動き一つ取れなかったアリシアの身体が大きく跳ねた。

それは、おそらくアリシアの、人生で初めて、快楽の極みに達した瞬間だった。

「は、はひ、あ、あああ……あ」

心臓が破けてしまうのではないかというほどに荒くなった呼吸をなんとか整えようとするアリシアだったが、

「え、や、あ、あああ……っ！」

アリシアの太股のあたりを這っていた管が、バリアジャケットのスカートをまくり上げて、アリシアの股間に這いずってくる。

「やだ、そんな、どこ、や、だめ、おねが、あ、んんん……っ！」

管が二本、それぞれ左右の股に絡みつき、ショーツを吸い上げるようにして引っ張ると、その間から三本目の管がアリシアの恥丘をゆっくりと這い上げる。

「ひいっ……っ！ やだ、やだあああ……っ！」

涙で視界を曇らせながら、しかし抗うこともできず。

「あ、は、あああ、あ……っ！」

自分以外の誰にも触れられたことのない場所を、おぞましい触手のようなものによいように弄ばれ、アリシアは恥ずかしさで気を失いそうになった。

「あ……っ！ あ、あああ、あああ……っ！」

管の先端のヒダがアリシアの股間のスリットに触れ、そのまま分け入るよ
うにアリシアの陰部に侵入しようとする。

「あ、は、うあ、あ……ああ」

と同時に、別の管が、胸ではないもう一つの突起……アリシアの陰部の突
起に触れた瞬間だった。

「ひ、あ、ああああああああああああああ……！」

二度目の絶頂。

先ほどとは比べものにならない、脳髓に直接流し込まれたのではないかと
いうほどの快感に、アリシアの頭の中が白くなっていく。

そのときだった。

それまで完全な暗闇だった視界が一瞬輝いたような気がして、アリシアは
眩しさに目を閉じた。

「え……？ あ……」

おそるおそる、瞼を開く。

と、相変わらず視界は暗いままではあったが、その中で赤や青の人工的な
光が明滅していることにアリシアは気付いた。

「え、あ、もど……った……？」

首をひねって周囲を見回す。

そこは、最初に入ったシミュレーターの中だった。

いつの間にか、両手と両脚には鉄の輪が枷のようにはめられている。

「え、きやあああああ……！」

アリシアが羞恥の悲鳴をあげる。

着ていたはずの制服はおろか、下着すらも全てはぎ取られ、アリシアは生
まれたままの姿でシミュレーターに横たわっていた。

「なに、これ、私、どうして、なに……が」

枷が外れないかと身をよじってみるが、手首と足首を完全に固定され、ほ
んど動くことができない。

「ママ……フェイト……」

これは、誘拐、というやつなのだろうか。

自分は、これからどうなってしまうのだろうか。

「だれか……たすけ……」

と。

シミュレーターの中で、なにかが動く気配がした。

それも一つではない。アリシアを取り囲むようにして、周囲からなにかが
ゆっくりと這い上がってくる。

「ひ……ひい……っ！」

それは、先ほどと全く同じ形状の管——触手だった。

それが身動きの取れないアリシアの目前で、もぞもぞと不気味に蠢いてい
る。

「あ……あああ……」

アリシアの股間から、黄金色の液体が吹き出す。

「や……やだ……あ」

が、シミュレーターの中で漏らしてしまったことなど些細なことと思える
ほどに、アリシアは恐怖に怯えていた。

「やだ、や……だれ、か、いやああ……」

触手が、アリシアの身体に触れる。

ヒダが、アリシアの肌を舐め、擦り、摘み、柔らかな部分を揉みしだく。

「あ……ああ……」

そして、何本かの触手はいまやはっきりとわかるほどに隆起しきったアリ
シアの乳首に、次々と刺激を与えていく。

「いやあ……あ、ん、ああ、ふ、あああ……」

同時に、アリシアの股間、その小さな突起も、触手は同じようにして、
弱く、強く、優しく、荒々しく、何度も何度も繰り返し弄んだ。

「は、あ、や、ん、あああ……！」

三箇所を同時に責められる。そのまるで神経を直接いじられているかのよ

うな快感に、アリシアの身体が反応する。

「ああ、や、も、は、ああああ……っ」

肌を濡らす汗を飛び散らせ、アリシアの肢体が再び跳ねた。

「や、あ、んあ、ひ、いい、ああああああああっ！」

三度目の絶頂。

それでも、触手たちはアリシアを責めることを止めなかった。

「や、だめ、もう、あ、ああああああああっ！」

再び両方の乳首をいのように弄ばれ、四度目。

「ひゃ、ふ、はあ、ん、ひ、いいいいいいっ！」

陰部に絡みついた触手のヒダに突起をこすりあげられ、五度目。

「はああ、ん、ひ、ひゃ、は、んんん……！」

うなじ、腋、太股、臍、乳房を延々と舐めるように刺激され、六度目。

それから、何度達したのかわからない。

すでにアリシアの意識はほとんどなく、目は開いているが焦点は定まっていなかった。

「は、あ……ふ、あ」

肉体的な反応に合わせて声は漏れるが、そこにアリシアの意思はない。

股間からは、何度吹き出したのかわからない潮と尿、それに愛液が混ざり

合い、ぼた、ぼた、と垂れている。

すでにほとんど反応を見せなくなったアリシアに、焦れたのだろうか。

一本の触手が、アリシアのスリットに先端をあてた。

と同時に、まるで示し合わせたかのように、もう一本の触手がアリシアの

尻を分け入るようにして広げる。

「ひ……あ？」

その不気味な感覚に、アリシアの意識がわずかに反応した。

その瞬間だった。

「い、ぎ、あ、やああああああああっ！」

二本の触手が、アリシアの前と後ろの二つの穴を、同時に一気に貫いた。

「いやあああああああ！ 痛い、痛いいいいいっ！」

アリシアが泣き叫ぶが、触手は容赦なくアリシアの腹の中を責め立てる。

それは、まるで全身の内臓を犯されているような、快楽とも苦痛ともつか

ない感覚だった。

「やあ……あ……」

さらに、それまでと異なる、数本の細い管が、アリシアの耳と鼻、それに

尿道へと伸び、同じように中へと分け入り始めた。

「ひいいいいいいっ！ い、ひゃ、あ、ああ……んんんっ！」

更に悲鳴をあげるアリシアの口を塞ぐように、一本の太い触手がアリシア

の口内に侵入してくる。

「ん、んぶ、お、おえ、ふ、んん……あ」

身体中のありとあらゆる穴をつらぬかれ、もはやアリシアは、いま自分が

どういう状態にあるのか考えることすらできなくなっていた。

「ひ、ぎ、あああ、あ……ああ」

鼻と耳から分け入った触手には、神経をかき回され。

「は、ああ、あ……う」

尿道は触手に貫かれるままに尿を垂れ流し。

「ぐ、ぶ、あ、あああ」

口内で暴れる触手には、喉の奥の奥まで犯されているかのような感覚に陥

り。

「ひぎ、が、く、ああ……あ」

そして前後の穴を貫く触手に、アリシアは自分の身体が壊されていくの感

じていた。

「ひあ、あ、ふ、う、んん……」

触手の動きが激しくなる。

股からは愛液とも尿ともつかぬなにかが止まることなくあふれだし。

涙も、汗も、唾液も、身体からなにかもが搾り取られていくような感覚をおぼえながら。



アリシアの意識が、ゆっくりと混濁していく。

「お、あ、あああ……あ」

そして、最後とばかりに膣内の触手が、子宮口をつらめくかのような勢いでアリシアの身体を突き立てた。

「ひ、あ、あああああああああああああああああああああああああああああああああつ！」

絶叫。

やがて、アリシアの身体から全ての触手が引き抜かれたとき。

アリシアの意識は、完全な闇へと落ちていた。

「あ、アリシアおかえり」

シヨップT&H。

シミュレーターの前で客にシステムの説明をしていたフェイトが、デュエルルームに入ってきたアリシアの姿に気付いて声をかけた。

「うん、ただいま、フェイト」

アリシアが手を振って答える。

「新システムのテストに行ってたんだよね？ どうだった？」

客の対応を終えると、フェイトはすぐさまアリシアに駆け寄り、興味津々といった様子でそう問いかけた。

「うん、すごかったよ。とっても、気持ち……よかった」

アリシアが笑みを浮かべる。

「え、お姉……ちゃん？」

その笑みは、それまで見たことがないほどに艶やかで。

一瞬なにがあったのか、と思ったフェイトだったが、

「ん、どうかした？ フェイト」

そう言って笑うアリシアは普段と変わらないフェイトのよく知るアリシアだったので、フェイトは勘違いか、と思い、なんでもないよ、とだけ答えた。

「気持ちよかった、って、動きやすいとか、綺麗とか、そういうこと？」

「うーん、ちょっと口では説明できないかな」

アリシアがいたずらっぽく、フェイトを焦らすように首を振る。

「へえ、そんなに凄かったんだ？」

「うん。ね、フェイト」

フェイトの手を取って、アリシアが笑う。

「今度は、仲間の人も連れてきて、って言われてるんだ。だからフェイト、

次は一緒に行こう？」

「あ……うん、そうだね。なのはやアリサ、すずかたちも誘っていいかな」

「もちろん大丈夫だよ。そうだね……みんなで、いこう」

「うん、それじゃ、早速なのはたちに声をかけてみるね」

そう言って、フェイトはコミュルームに向かって駆け出した。

そこではいま、なのはたちがデッキの検討をしているはずだった。

「そう、だね……私も楽しみだよ、フェイト」

誰にも聞こえないようなかな声で、アリシアがぼつり、とつぶやく。

と同時に、アリシアの脚を乗が一筋、つ、と伝って床に落ちた。

それが、アリシアの陰部からシヨーツを濡らして染みだした愛液であるこ

とを気付いた者は、誰もいなかった。

魔法少女アリシア惨 END

テキスト はづきち

イラスト やえば

Guest

村田電磁



あとがき



Illust:村田電磁、やえば、INふえるの

初めましての方は初めまして、日頃お世話になってる皆様はこんにちわ。やえばです。この度はこちらの作品「魔導師ランク・触手SSS」をお手に取っていただきありがとうございました！

今回はサークル「CappuccinoLaboratory.」様の「はづきち」さんに声をおかけいただき、このような素敵な場に同席させていただける運びとなりました、本当に感謝です。なお、今回「CappuccinoLaboratory.」様の新刊の挿絵を担当させていただいておりますのでそちらも合わせてご覧いただければ嬉しいです。

毎度の事ながら今回も「村田電磁先生」「INふえるの師匠」のお二方にご助力を賜りました、二年ほど前にも三人で上のポストカードを作ったのですが、こうしてまた三人でなのはの作品を作れた事を嬉しく思います。

闘う女の子が大好きな私、普段は格闘ゲームが中心ですが、なのは作品などもこうして手がけておりますのでpixivやツイッターなどで見かけた際はどうかよろしく願いいたします！

発行日:2014/11/24

発行:あんぶろっく！

著者:やえば(twitter:yaeba209241)

連絡先: kanu5963@yahoo.co.jp

印刷:ねこのしっぽ様



2014 あんぷろっく！

